

共同制作による空間造形の考察

— 彫刻と空間の関係 —

松隈康夫 藤本和彦

要旨

個人と集団／個人と公共、(personal : public)／日常と非日常／都市と地域、など、現在、表現分野で頻繁に題材にされるモチーフだが、社会全体でも様々な視点、解釈、を通して話題になる事柄である。いろんな場面で繋ぎ合わされたり、細分化されることで、多方向からの探求と試行がおこなわれる。加えて、国内と国外や、屋内と屋外、スケールの大小など、表現分野での具体例も、あげるとそれぞれの関係性も理解度が高まると思われる。

ここでは、美術分野(造形分野)の役割や状況把握から、2つの地域連携実践例を振り返ることで、初めに上げられた諸関係の在り方を考える。以下の項目での展開から本内容を探る。

○公共空間における「造形」の役割と実際

* 恒久設置と空間造形(ここではインスタレーション)の対比、これらの性格と役割、造形の本質と伝わり方、効果と与える影響、その後の諸問題、など、現在の状況を広く端的に俯瞰する。

○地域連携において共同制作を通じた「立体造形」の展開。

地域の要請からその意図を捉え「美術」や「造形」の関わり方を探る。その実践として北広島での「酪・牛・農 アート祭」、苫小牧での「紙フェスティバル」の活動報告。共同作業を土台とした「表現活動」の探求から、場所性の理解と制作への反映を実行。それぞれのイベント参加での諸活動を事細かく割り出し、「共同作業」「発想構築から実制作」「展示(展開)とコミュニケーション」等に分けて記述、そこを振り返り、深く理解に及んだ場面や気づけた事を確認・把握する。最後に全体を見渡し、今回の活動における共同作業の性格や意義を振り返った。

キーワード：共同制作 地域連携 公共空間

I. はじめに

美術的表現行為が地域との連携の中で、イベントなどへの受動的参加、能動的提案や参画をし始めて久しいが、常に受け入れられる形を探りつつ、また積極的に提案し成熟がみられると同時に、セオリーを感じる「動き方」が良くも悪くも出来ていると思われる。周りを巻き込む形で参加を促す側も、様々な問題に対する解決の可能性を模索し、企画・提案する側も、方法・形式が多様多様となった。美術分野でも、教育的なワークショップや、短期間の体験的プログラム、定期的なスクール形式など、年齢や人数、期間を問わず、盛んに行われている。その中でも、ここ何年かでは、年に一度、同目的で毎年開催される長期的なものや、即、反応の現れるイベントなどに目を見張るものがあり、地域・人・との「関わり方」の深化、「連携思考や方法」の深化を目的に、起こす側、関わる側、それぞれある動きのなかで「共同作業」「共同制作」の有効性を探った。ここでは、公共空間における「造形」の役割と現実。「地域連携」の性格と「共同制作」をポイントに、江別市の「酪・牛・農 アート祭」と苫小牧市の「紙フェスティバル」での実践についての報告、考察をする。

II. 公共空間における「造形」の役割と実際

ある空間に美術作品が置かれたとき、そこにはリズム感や量感、動きなどが影響しあい、見る者に様々な感情、感覚が生まれ、潤い、刺激あるいは対話を生む空間として生まれ変わります。一言で空間と言っても、屋内空間、ビルが林立する都市空間、森や海などの自然空間等様々です。最近ではこの空間という言葉にかわり、環境という言葉がよく使われています。ビル、風、音、樹木などの環境に加え社会環境といった言葉もよく耳にします。

モビールで知られるアレクサンダー・カルダー(1898-1976 アメリカ)は少しの風でも動く作品で運動、時間、変化する空間をつくる一方で都市空間においてスタビルとよばれる動かない巨大彫刻を設置することで、都市で生活する人間の精神へはたらきかけています。(写真1・2)

1960年代からはアース・ワークあるいはランド・アートとよばれる作品が登場してきます。美術館などの閉ざ



写真1：アレクサンダー・カルダー：「フラミング」シカゴ連邦ビル



写真2：アレクサンダー・カルダー：「.125」JFK 国際空港



写真3：カラチェフ・クリスト：「島の梱包」
マイアミ市 ビスケン湾

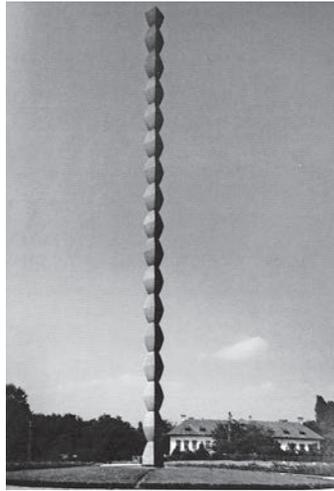


写真4：コンスタンチン・ブランクーシ
「無限柱」ルーマニア「ティルグ・
ジウ公園」



写真5：コンスタンチン・ブランクーシ
「接吻の門」ルーマニア「ティルグ・
ジウ公園」



写真6：ロバート・スミッソン：「スパイラルジェティ」
アメリカ・ユタ州・グレートソルト湖

された空間ではなく自然の大地に向かい環境そのものであったり、環境と人のかかわりなどを提示しました。ロバート・スミッソン(1938-1973 アメリカ)やカラチェフ・クリスト(1935~ブルガリア)は代表的作家です。(写真3・6)

彫刻と環境との関係を本質的に提示したのはコンスタンチン・ブランクーシ(1876-1957 ルーマニア)ではないでしょうか。私も好きな作家のひとりです。かれはまわりの景観や場の意味なども考慮し、ルーマニアのティルグ・ジウ公園に1937年「無限柱」「沈黙の円卓」「接吻の門」を設置しました。(写真4・5)これは環境と調和したすぐれた作品で環境芸術の先駆けといえます。

アース・ワークは自然のなかで環境と人のかかわりを提示することが多いのですが、一方で都市空間、公共空間にもさかんに作品が展開されています。

都市空間、公共空間といってもさまざまです。ビルが立ち並ぶビジネスゾーン、親子やお年寄りが憩う公園ゾーン、生活の中心である住宅ゾーンなど細分化すると限りなく多くの環境がありますし、屋外にかぎらず屋内空間でも美術館や役所、病院や体育館など、こちらも種々の環境と独自性をもっています。

札幌を見てもかなりの数が設置されています。大通り、駅前通り、札幌駅、モエレ沼公園、石山緑地等々様々な場所に様々な素材、スケールの作品があります。少し気を付けて歩けば必ずどこかで彫刻を目にするような状況です。しかし彫刻が必ずしもいい状態にあるとは言い難いものも多く存在します。作品を設置すれば、それで文化的と勘違いし、そのあとのメンテナンスや周辺整備を考えていないケースが多々あります。常に美しい環境づくりに気を配らなくてはいけませんし、めまぐるしく街並みやその他の環境が変わる時代ですから、場合によっては移設等も考えながら景観を考えていかななくてはならないでしょう。

設置する場所(空間)によって意味、目的が違います。駅やオフィス街など毎日同じように忙しく通勤、通学する人が多い場所では気分がさわやかになったり、元気やある種の刺激を感じる作品がいいでしょうし、公園などは、親子が安全に楽しく時を過ごせ、お年寄りもゆったりできる癒しの非日常空間の創出が求められると思います。このようにいろいろな場所があるなかで、最近大変気になるところがあります。それは病院です。病院といっても眼科、小児科、内科、外科、神経科など様々ですし、同じ小児科、内科といってもいろいろな症状の患者さんがいます。皆さんそれぞれに肉体的、精神的に苦痛をかかえています。アートセラピーという言葉が使われるようになって久しいですが、はたしてどのような作品が患者さんの心を癒し、希望につながるのか、とてもむずかしい問題です。作品だけではなく流れる音、音楽も同じように重要です。

たとえ数人だとしても不快に感じたり、精神不安定になったりしてはいけません。しかし美術作品もない、音楽も流れていないような、なんの感動も、喜びも、癒しもない殺伐とした空間はやはり耐えられません。

人とかかわってこそそのアートです、(そうではないアートもある)個人レベルだけではなく、医療機関、地域がもっと真剣に取り組むべきだと感じます。

現代に生きる我々は、多くのストレス、孤立感、経済的・社会的不安等々、様々な精神的問題をかかえています。これらの問題を少しでも解決、緩和できるよう、造形家は深い認識と高度な空間感をもって、より一層質の高い豊かな空間の創出を目指さなくてはなりません。

つぎに、地域連携の一環で学生が取り組んだプロジェクトを紹介したいと思います。

ふだん街中で見かけるような恒久的なものではなく、決められた期間だけ作品を設置するものです。また学生個人が制作するのではなく、共同での制作としました。舞台や交響楽団などは多くの人が一つの目的に向かってそれぞれの役割をしっかりとこなしていくわけですが、美術の世界においてこのような共同作業はほとんどないと言えます。基本個のしごとです。しかし、私もかつて5人の作家と共同で公園の設計、制作をしたことがあるのですが、個では生まれてこなかったような造形がいくつも誕生しました。

そのためには、まず自分の考えをしっかりとわかりやすく伝えること、そして人の言葉にしっかりと耳を傾けることがなにより不可欠です。お互いを認め、意思疎通をはかり、しっかりと同じ目的、風景に向かっていくことがとても大事です。

学生にとってこのような経験をすることは今後の作品制作はもちろん、すこし大袈裟かもしれませんが人生にとっても意義のある経験になるとの想いで共同制作というかたちをとりました。

学生がその地域の文化や作品が置かれる環境など様々な要素をどのように考え、どのような作品を目指してい

くのかとても楽しみです。

III. 地域連携において共同制作を通じた「立体造形」の展開

1. 協同制作「酪・牛・農 アート祭」

1.1. 実施概要

北海道牛乳普及協会とホクレン農業協同組合連合会の共同開催されたプログラムの一つで、「よく遊びよく学べ」を基に、酪農・牛・農産物をテーマにしたアート作品の展示をおこなった。学びや遊びの体験プログラムと合わせて、メインのイベントとなった。2012年10月19日20日21日の3日間、場所は北広島市の「ホクレン食と農のふれあいファーム くるるの杜」内の屋外空間の芝生、サイロ等の外壁、施設間通路脇、レストランのロビーに設置。参加は札幌近郊の美術・デザイン系、4つの大学・専門学校と千歳の中学校が平面作品の特別出品として参加。各校には平段ボール100枚が提供され、事前提出のブランドローイングをもとに設置場所を事務局との協議にて決定。3日間のイベント前日に設置をし、初日のオープニング時には作品解説、各校、観覧者との交流がおこなわれた。

1.2. テーマの理解と共有・協同

いろんな行事と重なる時期のため、コース単位の参加ではなく、有志を募り、平面・立体の学生1年生から4年生までの9名の参加となった。大学内、同年代とのコミュニケーションだけでなく、外で得られる広い価値観との接触や社会との繋がり方の深化、単なる課題ではない自発的な発想と行動の模索などを掲げて、賛同した学生全員と、まず主旨の共通理解から始めた。

企画として、実施運営事務局から、「このイベントを通して様々な角度から北海道の酪農に対して、より一層の理解を促し、親近感の喚起を深める」ことを目的とするとの説明をうけた。主旨自体は複雑ではないが、いろんなニュアンスから共通認識の把握にむける努力は欠かせないものとなる。更に表現分野の集まりからどういったアプローチが可能なのか、まずはこちらからの大枠の提示をし、個別考察ののち、全体のディスカッション進行役を決め意見交換に入った。積極的に自ら学習する姿勢と、意志疎通、複数意見の接点模索などに留意しながら、制作スケジュールを詰めていった。

1.3. 制作意図と展開考察

まずグループ分けを検討したが、9名という多くも少なくもない人数のため、その時々作業内容によって、全体で動く時、分けて動ける時など、臨機応変に作業することとなった。

イベントの要請内容に直接的に「牛」や「牛乳輸送缶」などを作るのではなく、若干、アイデアを練って、斜めから臨む姿勢が大勢を占めた。具象・抽象の間をとったような、見る側に少し委ねる部分を設け、身近なテーマを少しだけ考えられるような表現を選ぶことになった。美しい曲線、曲面を持つ「たまご」、でも大きさは人よりも大きく。また柄は牛の白黒模様で、構造は規則的、面を直交で組み合わせた、すかさずの空間を持つかたち。その通りのかたちからだと受けるイメージはきわめて狭いものになり得る。そこから思い描ける「何かがうまれそうな」「でも実際には居ないような生き物が…」「けど何処かで見た可能性のある…」など現実と架空を行き来する「存在」を作る事に決定。

具体的な細部の設定にすすめ、徐々に丁寧な制作意図が出来上がっていく。サイズは長辺で3m弱、奥行・高2m弱、平面を縦・横、差込状で組み立てる構造。黄身のあり得る場所は子どもが入れるくらいの球状にくり抜き、かさねて、微妙に「牛」も想像出来るように、小さめの黒斑模様を採用。構造的には少々シンプルなので、組み合わせるパーツの強度が必要となりそうだ。

提供される段ボールは縦150cm×横100cm×厚8mm。最低でも2枚ずらし重ね、必要なら3枚ずらし重ね。といった具合でシンプルだけに、クオリティーを上げるだけでなく、歪まないものを基本とした。パーツ枚数も多過ぎず、少な過ぎず、適度な余白の空間を取り込む造形を意識したようだ。別素材でメロン程度の大ききで模型を作り、実際にカットしたものから採寸、簡素な図面を起こし、拡大後のサイズを割り出した。実物製作作業に合わせた方法、使用する道具などをまとめて、作業が始まる。



写真1



写真2

1.4. 実物製作過程

- * 割り出された、パーツそれぞれのサイズに余裕を待たせられるよう、ずらし重ね(2枚、3枚…)用の板素材を用意する。
- * 卵型楕円形アウトラインを作図し中心線を下書きする、その線から内側、黄身の円形的位置を決め、作図する。
- * パーツもかなり大きいので、作業テーブルを組み合わせ、その上でのカット作業。四方から4人でカットし始める。(写真1)
- * アウトライン、黄身円形をカット後、それぞれのパーツに差込部分(幅は板厚)のスリットを切り込む。
- * パーツどうしの仮組をおこない、緩くなり過ぎず、適度に密着を感じるようなスリットを入れる。(写真2)
- * 段ボールから剥がした紙をパーツの厚みにカットした紙テープを作り、パーツの断面に糊付けしていき見栄えを仕上げる。
- * 一度全てを仮組みし、転がらないよう底面に当たる部分を平面でカットする。それに合わせた底面用の楕円形ベニヤを作成。屋外設置時、風等で飛ばしてしまわない工夫として、φ10 異形鉄筋の固定用芯棒を10本ほど作成。鍵状に折り曲げた、長さ50cmほどの固定金具。



写真3



写真4

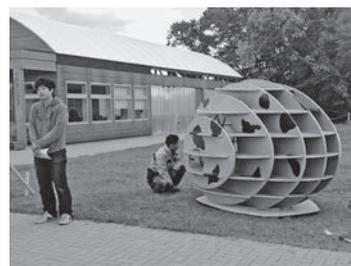


写真5

1.5. 作品設置

事前に決まり、下見した場所まで行き、その横の、幅広い煉瓦敷き通路にパーツを運び込む。少し風があり、肌寒かったが、晴れていたため、作業は順調にすすめられる。一度全体の仮組みをしているので、それがシミュレーションとなり、組立の優先順位などの確で、極めてスムーズな作業となった。その後、黒カッティングシートでの斑模様貼り付けに入る前、皆で少し離れて見たとき、屋外空間と作品のスケールにあるギャップが予想以上に、地面に埋まっていくような印象が高まり、一堂、驚きと困惑に包まれた。微妙に凹んだ場所で、最下部が見えにくく、それが埋もれる印象に繋がったようだ。ただ幸いな事に、すぐ近く、探すまでもなく、少し盛り上がったところがあったので、仮置きしてみると20cm程度でも高さが変わると作品の最下部まできちんと確認でき、「地面」より、「空間」へのアプローチを感じられる展示となりそうだった。

急遽、事務局と打ち合わせて場所の変更が決まり、そこに移し、固定作業に入った。用意した鍵型金具10本弱できちんと設置完了。その後は黒シートを適度な不定形にカットし、直角に交わる平面に自由に場所を見つけ、

9名全員で貼り込み、仕上げる事ができた。(写真3・4・5)

初日の作品解説で、チーム代表が「たまごの美しい曲線と段ボールの素朴感や構造を活かし、暖かみのある作品を作りました。この作品は中に入る事ができるため、身体で作品や作品の持つ空間を感じていただきたいと思います。」との言葉で結んだ。

2. 協同制作「第26回 紙フェスティバル」

2.1. 実施概要

このイベントは「創る喜び、遊ぶ楽しみ——見てふれて、感動を共有しよう——」をテーマに、紙の街、苦小牧市で毎年開催される「紙」と密接に触れ合うイベント。ここでは行灯(あんどん)やドレス、花などの造形作品の展示や、風車発電、迷路、遊具、ゲームのほかに楽器やペーパークラフト作り、紙の手漉きや和紙染め体験ができる、制作・体験コーナーなどがあり、子供だけではなく大人も楽しめる「紙」のお祭りです。そのイベントに、これまでも継続参加していた「とまこまい風の会」の代表と本大学、社会学部の森教授の親交からイベント参加へとつながり、地域社会学科・美術学科 総勢15名で段ボールを使用した「樽前山」の縮小版を作成、展示に至った。イベント3カ月前、オリエンテーションから始まり、各作業のグループ分けのあと、班ごとの活動を開始。使用する道具・材料の準備・調達、各グループ内での作業内容確認、進行スケジュールの打合せ、各班との摺り合わせ作業…。意志疎通を意識した実制作ではシフト制ながら、夏休みの1カ月間をびっしり使い、パーツを制作・準備をおこなった。

イベント実行委員会との連絡やり取りを繰り返しながら、当日苦小牧のグランドホテルニュー王子で展示作業を開始し、ほぼ1/200の樽前山を、段ボールの立方体・直方体合わせて約1,000個を使い、組み立てた。イベントは1日だけのため、当日の夕方には搬出作業に入り撤収、後日反省会をおこなった。

2.2. 共同制作の思考と活動

①オリエンテーションからグループ分け

7月初旬、地域社会学科・美術学科双方の学生が集まり、地域社会学科の森教授から、主旨説明があった。まず、ざっくばらんな会話の内容のなかで、ポイントになったのが、グループ活動の多い社会学科の学生と、個性を重視した活動の多い美術学科の学生とのコミュニケーション、意志疎通の重要性であった。意見交換ができ、考え方、アイデアが出揃った後の着地点が、極めて客観的である事。意見交換の先には、常に、全体で向かう最終的な「作品」である事。ここは外さず、全員の総意を得られ、それぞれの得意分野があるため、スムーズに大まかなグループ分けがされた。大きく2手に分かれたわけだが、この段階で、まず「意見・質問等の集約・実際のやり取り」の係を決め、何か、動き、意見が出たときの繋がりを密にしていくことを確認した。その後は各学科に分かれ、小グループ分けの作業に移った。(写真1)

②各グループの役割による打合せ

*連絡班(会計兼務)

各グループ間、学科間のスムーズな情報交換、全員への諮り事、実行委員会との細部確認などの担当(会計業務含む)

*デザイン・進行案策定班(記録係を兼務)

本イベントの性格調査、地域の背景調査、全体デザインの考案、進行スケジュールの検討、決定などの担当

記録係は写真・ビデオ・プリント等による各段階(準備・制作・搬入・設営・撤収)の記録を担当。

*道具・素材 準備・調達班

先方から提供される大判段ボールの受取、切断、接着・接続、測定、消耗品等の準備

*実制作作業班(他班との兼務あり)

進行案に則り、実制作の進行を担当。また各段階・シフトに応じ、割り当てや日程の調整なども担当。



写真1

③進行と詳細設定

両学科の教員とデザイン班代表・苫小牧在住の学生で、事前現地下見をし、地域の歴史・現況・等を調査。また協同するイベント参加団体の代表からイベントの発端やこれまでの開催内容、今イベント進行スケジュール等の詳細説明をうけた。

南は大海に面し、西の樽前山や苫小牧川からの恵みを受け、早くから製紙業が発展し、「紙」と共に成長した苫小牧。グループ分けの前から、ディスカッションの中で、樽前山に興味のある声が多く、受けた説明から、苫小牧を知るにつれて、まちなか(ここでは会場を意味する)に樽前山を持ってきたい!といった構想が広がった。イメージからすんなりと方向が固まり、グループ分けののち、デザイン班が、まず会場で確保出来そうなスペースから、造形表現物(樽前山)の縮尺を割り出す。地形図から樽前山周辺の等高線を読み解き、人の暮らす地域と山林の境界を読み取り、造形物に置き換えるための設計図(平面図)を作った。

結果的には、傾斜が変わり始め、「樽前山」としての形が想像しやすくなる標高 500 m から上をデザイン化する事とし、縮尺は、約 1/200、完成作の高さを 3 m 前後と考えた。また形態として、より象徴化されるように促すと、デザイン班が検討を重ねて選択したのは、一目でわかる具体的な山の立体模型ではなく、造形的に、また見ていく中で徐々に気付けるものとしての、抽象的な幾何形体の集積となった。基本形(立方体、直方体など、極力統一したサイズの単位で組み立てる)のサイズや積み上げ方など平面図を元に中心付近にあたる、一番高い部分の位置を上下、左右に広がる距離を考慮しながら、慎重に決めていった。

(この時点では基本立方体のサイズは一辺 45 cm、6 段積み、高さ 2.7 m だった。)

④素材とのコミュニケーション

デザインから割り出し、何回もの検討をかさねて決めたスケールは約 1/225、完成作品の高さを 2.4 m (紙の厚みなどの誤差を含むと多少の拡大を予定)そこからパーツの具体的な数量、サイズ、製作方法を細かく検討し、試作品製作を経ながら、実制作への準備を進めた。

構造は立方体、直方体の積み上げで、サイズ等を、1 段 40 cm、一番高いところで 6 段を想定。

またその後の打合せで、苫小牧の協同制作グループからの提案が有り、山の周辺等に 2 枚の段ボール直交組み合わせの「木」を置くことに、検討の末、賛成を受けて制作・配置決定。詳細検討後、縮尺を「山」と同じ 1/225 だとあまりに小さ過ぎて分かりにくいのと、膨大な数が必要になるが、残る作業時間では用意できないため、「木」のみ 1/25 とし、樹種のイメージが伝わり易い針葉樹とした。(写真 2)

パーツ基本単位、40 cm×40 cm の立方体を 800 個、その立方体 2 個分の直方体(40 cm×80 cm)を 50 個、20 cm×20 cm の立方体を 100 個、その立方体 2 個分の直方体(20 cm×40 cm)を 50 個、段ボール提供枚数でのパーツ制作可能数量が、合計で 1,000 個ほど試算された。

*この段階において、体積的に少量の不足が心配されたので、体積の大きな場所の内側には 1,000 個のパーツの他に、縦 6 個×横 6 個×高 4 個分の木枠を組み、[立方体 144 個分のボリューム]と縦 4 個×横 6 個×高 4 個分の木枠[立方体 96 個分のボリューム]をプラスする案が出され、計 240 個分の仮想の体積増が賛成を受けて決定。

デザイン検討・日程シフト調整と同時に道具準備調達班が用意を進めていった。詳細は次の通り。

カッター(特大)10 本、カッター替え刃 5 セット、ハサミ 7 丁、クラフトテープ太 15 本、細 6 本、布テープ 50 本、素材の段ボール(180 cm×180 cm、厚み 8 mm の 2 層構造)は「とまこまい風の会」から 500 枚提供を受ける。

立方体展開ゲージ用ベニヤ板 7 枚、ステンレス 2 m 定規 2 本、ステンレス 1 m 定規 2 本、2 B 黒鉛筆 10 本。

2.3. パーツ制作

①分担と協同

デザイン決定後、制作班とデザイン・進行班の打合せをもとに、制作開始。シフトのため、毎日、参加の顔ぶれが変わるので、作業が始まる前の[打合せ]を必ず行うこととした。理由は、限られた、時間・作業人数・作業スペースに見合った動きを考慮したため、時間の無駄が発生しないよう、また



写真 2

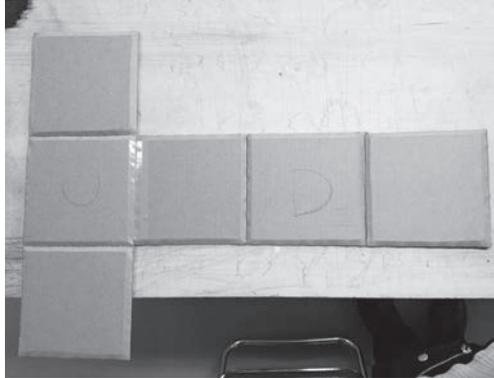


写真3

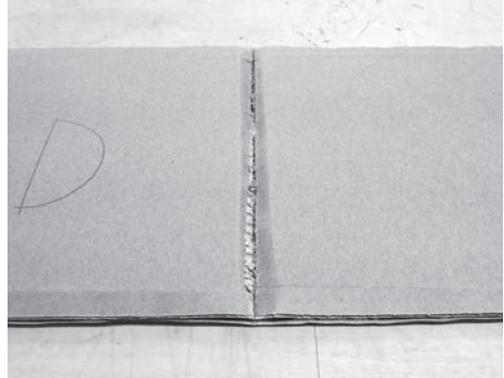


写真4

皆に仕事がまわり、負担のバラツキがないよう、作業内容がぶれなく皆が同じ方向を向けるように、との事だった。また、作業のほとんどが、切り出しと切り出した段ボールの組み立てとなるので、効率良い切り出し方法、組立方法を何通りか試しながら方法を決定することとした。

- 「切り出し」については、「ゲージ」6種を使用することに決定。詳細は基本立方体用ゲージ縦と横2種と1/2立方体用ゲージ2種。直方体用のみの縦ゲージ1種と1/2直方体用のみの縦ゲージ1種。
- 「展開図」では精度が出やすく、仕上がりに差が出にくい、横と縦を組み合わせたTの字型(写真3)に決めて、大判段ボールから切り出すためのゲージを作り、段ボールの切り出しを始めた。
- 「折り込み」に関して、2層構造の内側だけに浅い切り込みを入れて、90度に曲げていったが、折れ線が上手く直線にならず、折ると切り込みがあばれた。普通の厚みの紙では、浅い傷をつけるだけでも、なめらかに折り曲げられるが、段ボールの厚みが予想以上に仕上がりに影響することが分かった。別解決策を模索し、一人の提案を採用。カッターの持ち手の方を、折り線切り込みにあてて、ひと撫ですると、45度ほどにつぶれ、スムーズかつ丁寧・正確なものになり、短時間、また正確なものが、同じ精度で仕上がりはじめた。(写真4)

まずは、その日の参加者ほぼ全員で切り出しから始め(初日は全員カット作業)、3日目あたり、パーツが、ある程度の量がたまってきた段階で、組立班に分かれて、カット班、組立班の作業開始。最初は組立統一ルールの共有は出来ると考えたが、以外とばらつきが目立った。シフトもあったため周知がすんなり行かず、一個にかかる時間が長かったが、細かな修正などを加え、慣れが増すと徐々に改善された。組立てられたものは数量が一目で分かるよう、5段の列を並べるように集積することとした。(写真5・6・7)

前半は基本立方体パーツの切り出し。ほぼ毎日、2週間ほどかけると、立方体用パーツが予定の半分に達したので、同時進行で直方体パーツの制作、その後も徐々に、1/2立方体、1/2直方体のパーツ制作へ作業を分け、仕事の分担が進んだが、大きくぶれたりせず統一ルールのパーツが順調にたまってきた。その間、作業初めの打合せで、確認事項が出された。くたびれ始めたゲージを作り直し、誤差を許容範囲内に納める作業など、気の付いた部分、作業の効率化などが話題の中心となり、効果は実感出来た。

②自発的思考と実践

- ・パーツ数量が順調に増加する中、分かれた組立班の作業も順調に進み、立方体自体の山も作業部屋を埋め尽くし始めたので、組立スペースと完成品保管スペースも分け、3部屋の流れ作業に移行する事となる。作業の細



写真5



写真6



写真7



写真8



写真9

分化と分担は進み、無理のない程度の、いろんな作業の兼務も増やしていった。組立の中で、接合部分の貼り合わせ方に個人差が際だってきたため、作業前打合せで、ツヤなしクラフトテープの扱いについての確認をし、すぐ修正をした。(写真8)

- 制作班が勢いよく作業を進めるなか、あらためてデザイン班の一部(広報兼務)が会場で段ボール作品の横に置かれる「解説パネル」のデザインやタイトルに取りかかる。アイデアのやり取りを聞き、数点のアドバイスをした後、任せることにした。

結果的には、事前(一月前)に実際の樽前地区、樽前山周辺で、撮り溜めた、「地面」「壁面」「植生」「風景」「空」「川」などを山の形状に組み合わせたものになり、タイトルを「たるまえクラフト」と名付けられた。

- 切り出し、組立、完成品移動、それぞれの班の作業が進む中でも問題が起こると、作業前打合せに限らず、その都度の対応が自然と起こり、完成品保管の段階では、積み上げた時にサイズが狂っているものを発見して、修正、作り直しなどがあった。

順調な作業が続いたが、一つの誤算があり、予定変更が生じた。保管スペースを増やせば良かったが、基本立方体完成品が400個を超えたあたりで、スペースがほぼ無くなり、急遽完成品だけ、事前搬入することにした。最初の計画内にも事前搬入の予定は考えていたが、二週間以上早まった形になる。(写真9)

- 事前搬入後、さほど間を置かないうちに、空間増のための木枠組みの準備を始めた。2、7mの小割、接続用のビスも準備し、余裕ができた時には、組立のシミュレーションも終えており、驚かされた。

あとは、ほぼ問題も起こらなくなり、坦々と数量を確保し、全体搬入にむけて組立の準備(工具等)を詰める。

2.4. 実空間作業

①搬入・スケールの実感

第二陣の立方体、直方体を朝一、苫小牧から駆けつけてくれたトラックに積み出発。会場となる苫小牧グランドホテルニュー王子へ向け、残りの直方体など、工具とともに、マイクロバス(制作メンバー乗り込み)の空きスペースにも積み込み、こちらも出発。事前搬入された段ボール第一陣は別スペースで保管されていたが、展示日当日、いろんな人のサポートを得ながら会場へ移動。一時間ほどもかかりながら、札幌からの16名と苫小牧の10数名でホテルの大ホールへ運び込む。

展示スペースに運び込まれるとあらためて、「物量」と纏まった「スケール」に一堂、驚かされた。普通ではあまり見ることの出来ない、また触れることの出来ない、しかし現実にも目の前にある「量」に、「怖さ」まで感じられた。組み立てられる前の材料の段階でしかないが、良い意味での圧迫感に、組立後の期待が膨らんだ。(写真10)

②組立

組上げ第1段階として、立方体の前に、増量分の木枠の組立てを開始。木枠図面を元に準備した角材を底面からビス留めしながら、組んでいったが、途中で上手く合わなくなった。用意した角材それぞれの長さ、本数、が微妙に合わず、段ボールも含めた組み立て想定時間を2時間としていたため、原因究明もほどほどに、サイズはそのまま組み立て方を変更。少々荒かったが、サイズ、強度共に問題ないものへ、変化させることが出来た。遅れ気味になっていたが、木枠組み立てチームの作業の傍ら、段ボールの積み上げチームに指示していた、1段目から6段目までの簡易的積み上げ平面図が出来上がっていたので、すぐに組み立て作業が始められた。1段

目の平面積が約9m×9mと格段に広いため、組み上げをイメージするのに時間がかかるかと考えていたが、分割した改訂平面図の効果で、スムーズにイメージ出来、始められた。ただ、注意しなければならなかったのが、積み上げの優先順位だった。強度の問題で、立方体等の段ボールに載りながらの作業が不可能であるため、単純に1段、2段、3段…と段ずつ完成させながら積み上げていくと、端からかなりの距離が発生する、中央部に位置した最上部の作業が滞ることになる。木枠周辺から外側に広げていく形で、配置し、作業自体は、横への拡大配置担当と木枠周辺・中央部、縦への積み上げ担当に分けての行動となった。これに関しては、前日の打合せのなかで、全体に確認・周知済みではあったが、木枠でのトラブルのため、微妙に軌道修正しながら、周知内容をあらためて確認しながらの積み上げ作業となった。横への拡大、縦への積み上げ、更に直方体、1/2立方体、1/2直方体加わる作業のため、時々、混乱する場面を交えつつも、「山」全体、イメージ通りの組み立てを終えた。その後、苫小牧チーム作の直交差込型の「木」(高さ60cmほど)を配置。麓の森林のイメージから、床面(1段目外側)と1段目2段目の箱の上に約150本を配置した。(写真11~18)

③イベントでのコミュニケーション、反応と感想

展示作業を無事に終え、作品と鑑賞者の間に立ち、作品展開の解説をしたり、それぞれの感想を受け取ったり、コンセプトパネルとともに、補足的なコメントからイベントの一部としての「機能」を意識できた。多くの鑑賞者とのコミュニケーションを経て、「地元」の施設や環境の認知度や好みの温度差など、あらためて率直な声や感想などを得られた。

初期の段階では計画になかった「木」のアイデアだったが、デザイン化した「箱」だけの構成では、伝わりづらかった可能性が高い。作業中の反応としても、周りの他の出品者から、最初は、単純に「何これ？」という声しか聞こえてこなかったが、組み上がっていく「やま」、そのあとに加えられていく「木」、横に置かれた解説の「パネル」



写真10



写真11



写真12



写真13

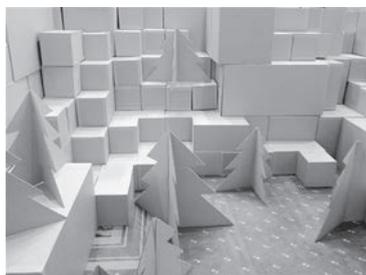


写真14



写真15

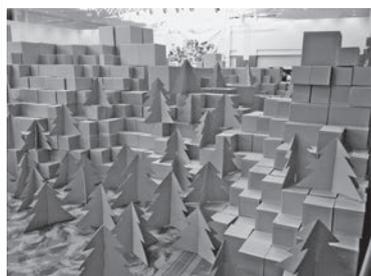


写真16



写真17



写真18

に触れるにつれ、「あっ、分かる分かる」「上から見てみたい」「登ってみたい(登れないものなので、焦らされたが)」「登って見おろしたい」などなど…会場から直線距離で17 km先にある、身近な山を、あくまでもイメージされたものではあるが、あらためて感じて貰えた言葉だった。イベントのこれまでの内容にも「紙」や「地域」、「文化」、など探り、深められた事柄は計れないほどあろうが、今回、会場で受け取った「声」や反省会で多く聞かれたことや印象に残った感想を具体的に数点上げてみる。

「これまでも美術と深く触れてきたけど、こんな「体積」は初めてで、それによって「空間」というものをより強く意識した」

「文字から意識する事はこれまでも多々あるが、(圧倒的な量)によって気づける事があったのは印象的」

「(空間)なんていつも、(広いね)(狭いね)の程度しか意識しなかったけど、風景写真とは違う(自然)を感じた」

「カドだらけの箱の塊だけど、なんか癒される。」

「(地元)っていつも意識したことないけど、外から見て、足元を「話題」にしてから急に関心が広がった。」

「イベントもそうだけど、長い時間のかかる事、大きなモノを生み出す時など、一人で出来るのではなく、意志疎通がどれだけ大事か、これに関わって実感することができた」

ここでは実物と比較すると、1/225にしか満たないものだが、実際の建物の中に入ると、人の手中に置かれる「模型」の感覚とは違い、また実際の「樽前山」という「自然」ともまるで違う。独自の在り方を持つ「造形物」からも少し変化し、入ることの出来ない建物のような存在を強く実感できた。また作る側も体験する側も、それぞれの「価値観」を持ちえた上で「大勢」になりコミュニケーションが生じると、考え方・感じ方・味わい方・動き方などの差や拡がりに触れることとなる。自分の思考が再肯定出来て、共感が強まったり、違和感を感じ、別の対応や模索、差を埋め、共有の糸口を探ったり…と、必然的に頭の動きをコントロールする事になる。ただ随所で、準備の怠った部分、想定が浅かった部分が見られたため、思いつきを出ない行動や、効果の無い場合に唐突な変更になったりと、周辺の動きを乱す事に繋がり、結果的に作業予定のずれ込みや出費増へ結びついてしまった。

IV. 振り返り

この結果を生み出す実践のうえで、気付けたところ、また注視すべきところが、ここでの主題となる、共同作業における、思考、着想、感覚、の多方向的な拡がり方と考えられる。個人の嗜好的な選択やそれぞれの経験でうまれた概念、一般常識の不確定な範疇など、似通ってはいても、微妙に差があるもの、差に繋がること、を経て、それぞれの考え方、感じ方が動き始め、変化する。選択肢が増し、どれが最善かを考える。動き方を学生主体として、決定を任せた段階で、想像以上に思考の切り替えを感じた。最初こそ、戸惑いから「答え」を求める姿勢が、たびたび現れ出たが、その都度生み出された新たな対応など自発的なコミュニケーションの深化と「動き方」の模索・創出・実行。それを「意識」し始めることから、応用の選択肢へ蓄積されたものと考えられる。

構想段階(グループ分けから、各グループ内ディスカッション、関係グループ間ディスカッション)では意見の交換にすら、遠慮と躊躇があり、内容の詰めに相当な時間を要した。ポイントとなる「地域連携」ではあるが、あまり視野に入っておらず、度々、先方からの提案によって、滞った事柄に流れが生じた。

制作段階(素材に向けて、制作作業に向けて、道具工具等の扱いについて)では実際にからだを動かす事からか、違和感を感じた時に、言語化された意識が出始め、みるみる自発的なコミュニケーションが中心となった。細かなところまで、それぞれのアイデアが内側へ、また先方へ提案され、どこを選択して落ち着くのか、不安を抱いていたが、殆どが取り越し苦労となった。

展示作業(搬入時の段取り、木枠の構造トラブル、その段階での対応、別班の可能な行動の模索)でこそ、トラブルなど、予想しなかった事が生じたが、それに対しても焦ることなく、別の対応策を皆で考え、クリアできた。

全体を通してのコミュニケーション(個人・グループ、地域)からは、それぞれのイベントで予想していた以上の反応を得られ、活動としての有意義な時間、というよりは、思考自体の成長を感じられた共同作業だった。また微力ではあるがそれぞれの場所で展開できた創作活動自体に関わる「人」に何かしらの「影響」を及ぼす事を感じられたのも事実だった。これは初めの段階で取り上げた「公共空間」での展開に関わり、作り上げる側、鑑賞する側、またそれを取り持つ側など、「人」が多くなればなるほど、容易ではなくなるが、それぞれの意志疎通や共通理解が深化したときに、急に距離が狭まることも結びつく大事な場面だったと思われる。

今後は許される範囲で、一過性の物ではなく良い形での「継続」を考え、「足元」の認知や愛着が生まれ、高まるような活動へ拡大していく「模索」を続けたい。

参考文献

- 1) アースワークの地平 ジョン・バーズレイ著 鹿島出版会 1993年
- 2) 世界の広場と彫刻 現代彫刻懇談会編集 中央公論社 1983年
- 3) ランドアートと環境アート リチャード・シュラッグマン著 PHAIDON 株式会社 2005年
- 4) CALDER'S UNIVERSE jean・Ripman 著 Running press
- 5) 立体造形を学ぶ 京都造形芸術大学編集 株式会社 角川書店 1998年[第16章「環境と造形」桐原淳行]